

# オーストラリア国立大学 現代中国センターとその周辺

中嶋 嶺雄 (東京外国語大学教授)

研究室の窓の外には、幾本かのユーカリが林立していて、その白い樹幹に昼下りの陽光が飛び跳ねている。空も大気もどこまでも澄みきっている。芝生の緑を保つためのスプリンクラーの回転音だけが律動していて、キャンパス一帯の静寂を刺戟している。

「日本はいま頃、日中平和友好条約でさぞかし大騒ぎだろう」と想像しながら、またそれゆえにこそ、図書館に入っている日本の新聞をあえて一切読まないという日常生活に至極堪能しつつ、今日も懸案の著作の完成に悪戦苦闘しながら、私は窓外のユーカリ樹とひとり対面し、しばしのくつろぎを待っていた。

そのような午後、三時半頃になると、きままって廊下から北京語や広東語が聞え

てくる。午後のティー・タイムが始まるので、中国人の留学生やリサーチ・アシスタントが会話を交しながら、階下の喫茶室に出かけてゆくのである。そうした中国語を聞いてみると、いま、自分はどこにいるのか、北京か香港にいるのはいかど錯覚することもあるけれど、窓外のユーカリ樹は、ここがまぎれもなく南半球の大陸オーストラリアの一角であることを確認させずにはおかない。

私は昨年十月から一年間、オーストラリア国立大学現代中国センターの客員教授 (Visiting Fellow) としてキャンベラに滞在し、先頃帰国したばかりであるが、私のオーストラリア行きを知って、二、三の友人や知人は、いかにもあ

きれ顔に、そして親切にもこんな助言をしてくれたことを想い出す。

それらは、「これから中国問題が重要になるというのに、なぜオーストラリアへなど行くのか」とか、「働き盛りの一年をあんな世界の片田舎で過すなんてもったいない」とかいったものであった。あるいはまた、大見栄を切ってキャンベラへ行ったのに、現地に適応できず、ある種の不始末さえ起して帰ってきてしまった一流作家のことを例にとったり、オーストラリア人のサルキーな対日観を例にとったりして、暗にオーストラリア行きを「牽制」してくれた。

これらの親切な助言は、大変有難いものであったが、しかし、私はいま、私にとってままったく未知の世界であったオ



オーストラリアでの一年を過して、この一年が自分自身にとっても、かけがえのない充ち足りた日々であったことに大いに満足し、感謝しているのである。

オーストラリアに行ってみて驚いたことの一つは、この国が六〇年代後半以降の国際環境の変化のなかで、みずからの生存の戦略のために、アジアの一員としてのアイデンティティーを真剣に求めはじめていくということであり、したがってアジアにかんする関心がきわめて高く、アジア研究（その中心は中国研究であり、日本研究であろうが）がきわめて盛んなことであった。

そうしたなかで、キャンベラのオーストラリア国立大学（ANU）は、この国の唯一の国立大学であるばかりか、そもそも当初から大学院大学として創立されたこともあって、世界的に見てもきわめてユニークな存在だといつてよいであろう。今日では、一般の学部も付設され、日本人の学部留学生も三十名近く学んでいるが、本来、この大学は七つの研究大学院（Research School）つまり研究所兼大学院）から成る大学院大学であっ

て、学生はPh.D.を取得する学生が主体であり、もっぱら研究はセミナー中心に運営されている（わが国からも、何人かの優れた学究がここでPh.D.を取得しており、たとえば国際関係論の分野では東京大学の渡辺昭夫氏、カリフォルニア大学の福井治弘氏らがいる）。

なかでも、太平洋地域研究大学院（Research School of Pacific Studies）は、第二次大戦後の一九四七年にこの大学が創立されて以来、南半球におけるアジア・太平洋地域研究のセンターになってきているといつてよい。

この研究大学院（院長は、マレーシア出身で、華僑学者のなかでも敏腕家として知られる中国史のワン・ガン・ウー教授）は、人類学、言語学、生物地理・地形学、考古学、人文地理学、経済学、国際関係論、政治・社会変動、東アジア史の九つの学科と現代中国センター、戦略・防衛研究センター、開発研究センターなどのセンターから成っており、伝統的な学問系列にとらわれない学際的かつ機能的な研究システムをとっているうえに、どの部門にも海外からの客員スタッフが常時

参加する体制になっていて、国際色が大層豊かである。研究スタッフの約四〇パーセントが外国人だということを知ったとき、わが国の大学と対比してその国際性には驚かざるを得なかった。

こうした開かれた状況は、たんにその国際性のみあるのではない。私が所属した現代中国センターの現在のヘッド（センター長）のステイヴン・フィッツジェラルド氏は、七〇年代初頭のホイットラム労働党政権の時代に三代半ばにして初代中国大使に抜擢された精鋭であるし（同氏は今日、オーストラリアを代表する中国専門家として活躍しており、ある意味で「親北京」の有能なタレントでもある同氏の学問的業績については、将来にまたねばならないが、氏の北京語は、戦後世代の英語圏学者のなかでも屈指と思われるほどに完璧である）、一方、この研究大学院に本年新設された政治・社会変動学科（Department of Political and Social Change）には、ホイットラム首相が、政界引退後、客員教授に就任して注目を集めたばかりでもあった。

現代中国センターは、一九七〇年に設

立され、七五年に正式にこの研究大学院の一機関になったとのことであるが(初代のヘッドは、女流の中国经济専門家としてその業績が国際的にも知られるオードレー・ドニソン女史)、こうした経緯は、この国の中国への関心の高まりの反映であると同時に、アジア・太平洋地域研究のなかでは、やはり現代中国研究がとくに重要であるとの認識の反映でもあろう。

ところで、現代中国センターは、センターといっても女性秘書が一人と小さなリーダーディンク・ルームをもつだけのものであり、専任研究スタッフのポジションはいまのところ上流研究員一名のみであって(この一年余は、中国軍事問題の専門家として知られるイスラエルのヘブライ大学助教授エリス・ジョフィ氏がそのポジションにあった)、この点ではきわめて小規模に思われるが、こうしたセンターのあり方は、専任スタッフのための人件費がかさんで、研究活動が不十分になるといふ、わが国の多くの研究機関とは対照率的であるといえよう。したがって、セ

ンターは、学内各学科、各部門に散在する中国関係の研究者が集まる活動的な研究集団であって、研究活動の方は、きわめて旺盛である。近く、同センターは *Australian Journal of Chinese Affairs* を創刊して英語圏の中国研究のセンターにもなろうとさえ志向している。

こうしたセンターにとって、私のような客員スタッフの存在は、かけがえのないものであるらしく(私の場合は、先方の要請によって国際交流基金の人物交流部から派遣された)、私と同じく米ペンシルヴァニア州立大学から客員教授として来ていたパリス・チャン教授も、大いに重宝がられたことはいままでもない。たまたまキャンベラで再会したパリス・チャン氏は、アメリカの第一線で活躍している台湾出身の中国政治専攻の俊英であり、わが国にもしばしば来日しているので、その名を知る方も多いと思うが、私とは、永いあいだの友人でもあるので、お互いに協力しあってセンターの活動を極力補助したつもりである。

こうした環境のなかで、センターの研究活動は、きわめて活発であり、定期的

に開かれる昼食時の討論会(Dinner-sion Lunch Series)や外来の研究者を迎えての特別セミナーのほか、センター主催の一連のセミナー(研究発表会。もとよりセミナーの場合は、英文ペーパー提出が原則になっている)が毎月二、三回、パネル(一種のシンポジウム)が毎月一、二回は最低限開かれている。因みに、四月から八月までのセミナーの報告者と題目を列挙してみると次のとおりである。パリス・チャン「『四人組』との対立の戦略についてのケース・スタディー」、デイヴィッド・マール「中ソ対立のなかのヴェトナム」・「第五期全国人民代表大会の人事分析」、デニス・ベイツォ「毛沢東とゲリラ戦争」、J・B・ヤコブ「最近の中華民国(台湾)の政治状況」、中嶋嶺雄「中ソ対立の歴史的考察」、ステイヴン・フィッツジェラルド「中華人民共和国における人権」、M・アンダーソン「モンゴルの地政学的状況」、G・マコーミック「韓国の『経済的奇跡』の神話」、エリス・ジョフィ「中国の軍隊」。さらにパネルないしはシンポジウムとしては、私自身が主宰

もしくはパネリストになったものだけをあげてみて六月「米中関係の展望」、八月「高崗事件——その再評価」、同「朝鮮戦争と今日の韓国」、同「日中関係の新展開」などがあつた。右のセミナー

のなかでは、中国の人権問題にかんして、『ニューズウィーク』に常時寄稿している中国・アジア問題のユニークな評論家で、『毛沢東の新しい制服』などの著者としてわが国にも知られるベルギー人のシモン・レイ（本名ピエール・リックマン）氏が、ステイーヴン・フィッツジェラルド氏とまっとうから対決するというハプニングもあつて、大いに関心を集めていた。しかも、以上のような現代中国センタ―主催のプログラムに加えて、東アジア史学科のセミナー、一般学部の中国学科やアジア文明学科のセミナーなどが開かれるのであるから、毎週数回のセミナーが続くことになり、これではどうしてもイージー・ゴイーニングになるからセミナーの回数を減らしてはどうかと苦言を呈した程であつた。

このような次第であるので、滞在の前半は、自分自身の研究に没頭していた私

も、いつしかセンターの活動の中心を担わざるを得なくなり、またたく間に一年が過ぎてしまったような気がする。

この間、オーストラリアの中国学の開祖でもある老碩学C・P・フィッツジェラルド名誉教授（前記のステイーヴン・フィッツジェラルド氏は教授の息子ではないかとよく間違われるが、血縁関係はまったくない。因みにC・P・の方はFitzgeraldであるのにたいし、ステイーヴンの方はFitzgeraldである）が健在でしばしばセミナーに出席されていたのは大変嬉しいことであつた。

最後に、研究大学院専用の附属図書館（メンジス図書館）や学部図書館（チフリー図書館）、それに近くの国立図書館の状況に触れねばならない。研究室から歩いて数分の大学の図書館は夏は夜十時、冬も夜九時まで開いていて、たまにたま著書を執筆しつつあつた私は、とくに研究大学院のスタッフ専用の図書館がこれほどの効用をもつことを初めて体験したといつてよい。私が必要とする英文の書籍や資料は、最近の米外交文書（FR）の一部を除いて、ほとんどすべてこ

れら三図書館で間にあつたばかりか、『人民日報』や『解放日報』も、まさに座右にあるのと同様に利用できた。国立図書館アジア室長の王省吾氏の尽力もあつて、その中国部門もきわめて充実しており、私の著書なども、たちどころに何冊か探し出してきてくれた。もっともわが国の中国研究の成果にかんするものは比較的手薄であり、また、これまでANUとわが国学界とのチャネルがどちらかというといわゆる“進歩的インテリ”の側にあつたこともあつて、わが国の研究者の諸著作の蒐集にはある種の“偏向”が見られたので、その辺の修正を要請してきたが、しかし全般的には、きわめて充実したものであることが指摘できよう。驚いたことに、私の故郷の信濃毎日新聞編『長野県人名録』なども、その最新版が入っているのである。もっとも本誌『文化会議』が蒐集されているかどうか、そこまでは調べ得なかつたことは、かえすがえすも残念であつた。

